

## 【聞き書き資料】

1943年・仏印から日本への最後のベトナム人私費留学生とベトナム独立運動

—— チェン・ドク・タン・フォン(陳徳清風)さん ——

An Interview with the Last Vietnamese Student to Japan from French Indochina:

Mr. Tran Duc Thanh Phong on the Vietnamese Independence Movement

河路 由佳

KAWAJI Yuka

### 1. 調査の概略

1935年に外務省文化事業部の「国際文化事業」としての学生交流、留学生教育の実務機関として設立された国際学友会は、中国を除く<sup>(1)</sup>世界各地からの留学生の受入れを担当し、国費による招致学生、交換学生の他、各地からの私費留学生を受け入れていた。第二次世界大戦が始まると、欧米をはじめ各地からの留学生の新たな渡航は事実上途絶え、特に1943・1944年度は、大東亜省の指示による「南方特別留学生（南方文化工作特別指導者育成のための特別留学生）」として東南アジア諸地域（当時の名称でマライ、スマトラ、ジャワ、ビルマ、フィリピン、セレベス、南ボルネオ、セラム、北ボルネオ、タイ）から招かれた「南方特別留学生」205名が全体の大部分を占めた[河路 2006]。ただし、この205名の中にはベトナムを含む「フランス領インドシナ(仏印)」からの学生は含まれていない。

当時の国際学友会の日本語教室（1943年度より日本語学校）の学籍簿は1939年度在籍者から1944年6月入学者までのものが残っている。分類ごとに綴られた中に、「安南学籍簿」と書かれた綴りがあり、フランス領であったベトナムからの留学生全18名分がまとめられている<sup>(2)</sup>。1941年度、1942年度は私費留学生が7名、1943年度以降は日仏印交換学生3名、仏印招致学生7名と国費留学生が主になるが、最後の1名は私費留学生で、1943年12月23日に入学した「呼び名」の欄に「フォン」とある16歳の少年である。この時期、仏印から日本へは誰もが自由に渡航できたわけではない。フォンさんはベトナムの独立運動にかかわる軍人、久我道雄<sup>(3)</sup>の世話で来日したのであった。

筆者は2005年4月、このフォンさんに聞き取り調査を実施する機会を得た。結果、フォンさんが日本留学中、ベトナム独立の志をたてて東京に滞在していたクオン・デ（1882-1951）<sup>(4)</sup>と会っていたこと、久我道雄の家庭で特に久我夫人には息子のように大切に扱われたこと、戦後は米軍で働いたことなど貴重な体験が語られ、また同時期にやってきたベトナムからの他の留学生のその後、フォンさんの当時及び現在の日本への思いなどへの言及も得られた。

ベトナムからの留学生というと、20世紀初めに革命家のファン・ボイ・チャウ（1867-1940）らが民族独立運動として日本留学を呼び掛けた東遊運動が知られている。この時200名余りの留学生が来日したと言われるが、植民地支配をしていたフランス政府は自由渡航を認めなかったため、中国人名を使っての密入国であった。彼らは漢文の素養を持っていたため中国人留学生用の機関で彼らに交じって学ぶことができたという。こうした事情から日本側の諸資料では中国人留学生の数に含まれ、実態を知るのは難しい。一方、国際学友会では仏印政府と協定を結んで、交換留学生や招致学生、および仏印政府の認めた私費留学生を受け入れた。日本とベトナムの複雑な関係を反映して彼等の立場も複雑で、フランスの占領下のベトナム人留学生の事情や経験を文献資料で得ることは難しい。この

時期のベトナムからの留学生は人数が限られており、中でもフォンさんのように 1943 年に来日した私費留学生は他になく、16 才で単身来日したという例も珍しい。本資料では、そうした個人の稀有な体験が臨場感を持って語られ、当時の留学生教育や日本と仏印（ベトナム）との関係、ベトナム独立運動の状況を伝えている。

チェン・ドク・タン・フォン(陳徳清風)氏は、1927（昭和2）年6月11日生まれで、父はサイゴン陸軍渉外部（元フランス政府官吏）に勤務していた。1943年12月23日に国際学友会日本語学校に入学した（当時の住所は本郷区弓町久我道雄方）。学籍簿の備考欄には「1946年4月横浜セントジョセフカレッジ入学」とある。戦後も国際学友会館に住み続け、1955年3月12日に退館した。現在はアメリカ合衆国で暮らしている。

フォンさんは、2005年4月16日（土）に東京外国語大学にて行なわれた「ベトナム東遊運動百周年記念シンポジウム」で、「クオン・デ（彊柢）侯と東遊運動」という演題で講演した。筆者は会場でこれを聞いたが、そのあとお話し、改めて同年4月20日（水）21:00-22:40、新宿の京王プラザホテルの地下喫茶店にてお話をうかがった。フォンさんの講演は日本語でなされ、インタビューも日本語で行われた。後日、文字おこし原稿をお送りし、ご本人による加筆訂正を経て、談話資料を作成した。本稿は、調査からしばらく発表の機会を逸してきたこの資料に基づき、改めて稿を整えて発表するものである<sup>(5)</sup>聞き手（河路）の発話は――を付けて示した。当日、当時を思い出していただくための資料として、国際学友会の「安南学籍簿」より全学生の名前と本研究に必要な情報を抜粋して表にまとめたものを持参した。以下の（表1）がそれであるが、ゴシックの部分はこの調査でわかった新たな情報である。

表1. 国際学友会で日本語を学んだベトナム留学生（1939年—1945年）

（国際学友会「安南学籍簿」より河路が作成）

	名前（呼び名）〈Fは女性〉	生年	入学年月 <sup>(6)</sup>	備考（進学先など）
1	呉 文孟（ゴ） Ngo Van Manh	1916	1941/4	私費
2	ファム ダイタイ[範 大泰]（ファム） Pham Dai Thai	1919	1941/11	私費（1942/4 大阪大学医学部）
3	Pham Xuan Ngan ファム スン ガン（ファム）	1914	1941/11	私費（京都帝大聴講生,1945/4 京都帝大経済学部）
4	Luong Dinh Cua（クア） ロン・ディン・クア	1919	1942/8	私費（九州帝大,卒業後1946/12、京都大学農学部農学研究室へ）
5	ドー バン リー（バンリー） Do Vang Ly	1919	1942/8	私費（東京工業大学窯業科・ガラス、1947/6 アメリカへ）
6	グエン スン ワン（ワン）	1921	1942/10	私費（第三高校文科,1945/4 京都帝大経済学部,1950/4 同大学院、1950/9 米国ハーバード大へ）
7	ホー クワン フック（フック）	1915	1942/11	私費（目的は歯科医学研究,1945/10 上海へ）
8	Marcel Harmnand Barthlemy	1920	1943/3	招致（目的は日本語・法律学研究）

	(バルテルミー)			
9	Yves Rivoalen (リヴォワラン)	1923	1943/3	招致(目的は日本語・商業学研究)
10	Dang-van-Ngu (グー) ダン・バン・グー	1910	1943/3	交換(東京帝大伝染病研究所,後にハノイ大学医学部実験助手)
11	Ha Thu (ハ・ツー)	1915	1943/3	交換(東北帝大法文学部,1947/10東大工学部鉱山学聴講生,1950/12帰国)
12	Hoang dink Luong (ルオン) ホワン・ディンク・ルオン	1920	1943/3	招致(東京高等歯科医専,1946/歯科医専中退,1950/8 米国ウエスタン・リザーブ大へ。鑄金家)
13	Le Van Qui (クイ) レ・ヴァン・クイ	1918	1943/3	招致(東京工業大学電気工学)
14	Nguyen Thanh Nguyen (グエン) グエン・タン・グエン	1918	1943/3	招致(東京歯科医専 3 年,1946/3 歯科医専卒業,1948/6 米国へ)
15	Phan Thi Ly (リー) 〈F〉 ファン・ティ・リー	1923	1943/3	招致(日本女子大國文科,1 学期で退学,1948/1 米国サンフランシスコ州立大学)
16	Phan Thi Dao (ダオ) 〈F〉 ファン・ティ・ダオ	1925	1943/3	招致(東洋永和女学校保育師範科,1 学期で中退)
17	モーリス ジョルジュ シャントルー (シャントルー)	記入なし	1943/8	記入なし
18	チェン ドック タン フォン (フォン) Tran Duc Thanh Phong	1927	1943/12	私費(長野・伊那中学,1946/4 横浜セントジョセフカレッジ,1955/3 退館)

フォンさんが日本に滞在したのは 1943 年から 1955 年、16 歳から 28 歳に当たる。ベトナムの長い抗仏戦争から南北分断への時期を、戦中戦後の日本において、フォンさんはクオン・デの絶望を目の当たりにした。期待に胸をふくらませてやってきた日本での勉学も予定どおりにはいかなかった。それでもフォンさんは日本を第二の故郷と懐かしみ、現在住んでいるアメリカの家に日本庭園を作ったのだと写真を送ってくれた。

また、本調査でも言及されている国際学友会の教員、中村愛子氏には 1994 年 8 月に話をうかがったが、フォンさんへの調査のあと 2005 年 5 月 3 日に再び訪ねてお話を聞いた。中村氏はこの時期に教えた生徒とその後長く連絡をとりあっており、連絡の途絶えた人のことを心配し、不慮の死に胸を痛め、関連の新聞記事のスクラップを持っていた。本稿の注に用いた新聞記事は中村氏のスクラップによるものである。惜しみなく調査に協力してくださったフォンさん、中村愛子先生に心から感謝申し上げます。またきっかけを作ってくださって、いろいろご教示くださった今井昭夫氏に改めまして感謝の意を表します。

## 2. 聞き書き資料

### (1) 国際学友会で学んだ仏印からの留学生

——当時の国際学友会で日本語を学んだ学生の学籍簿からベトナム人留学生の情報を抜き出してまいりました。ご覧いただきながら、いろいろお話をうかがえたらと思います。

呉文孟はね、クオン・デ殿下の秘書ですよ。この人は終戦の時に帰ろうとしてバンコクかどこか経由して、サイゴンから北に行く途中でベトナムの共産党に殺されました。これは知っている人はそんなにいませんよ。帰って国のために何かやろうと思ったでしょうけれど、ご存じのとおり共産党は他のものを認めませんからね。クオン・デ殿下が来たらホー・チ・ミンは大変です。ホー・チ・ミンより、クオン・デ殿下の方が有名ですから。

——クオン・デ殿下は日本にいらっしゃいましたね。

そうです。だから、(呉文孟は)先に様子を見に帰ろうとしたんですね。でも、ホー・チ・ミンはそんなの認めませんよ。それで、殺されました。1945年の終わりごろか、1946年の初めか、わかりません。呉文孟さんは漢字で書かれています、「Ngo Van Manh」です。

ファム・ダイ・タイさんも亡くなりました。この人は日本人と結婚して、日本にいました。僕は終戦後しばらくこの人のうちにいました。その時奥さんと赤ちゃんがいました。45年に、もう赤ちゃんがいましたよ。お兄さんが有名です。お兄さんも殺されました。

ロン・ディン・クアは、1954年の終わりごろ帰ったですよ。南に帰ったです。奥さんは日本人の中村信子さん。共産党員ですよ。冗談で奥さんのことを「ノブコフ」と、ロシア風に言っていました。この人は南に帰ったけれど、数ヶ月後に北に行きました。イデオロギーの問題ではなくて、この人は農学の博士ですから、米を作るとかの方面が上手だから、北のほうは食べ物も足りないとかでかわいそうだから、北に行ったんでしょう。北の方ではこの人をよく使ったけど、(この人は)死んだ。人のうわさでは殺されたようです。もともと南の人です。南の人は率直なので、たぶん何か(政府に)不満のようなことを言ったのでしょう。サイゴンの道にはこの人の名前のついた道があります。

それから、このダン・バン・ゲーさん。この人は1951年に早めに帰ったんです。ハノイとかサイゴンではなくて、ジャングルの方へ帰ったんです。この人は、医科大学を出たでしょう。特に日本で勉強したのはペニシリンの作り方でした。ジャングルにはペニシリンが足りないでしょう、と。それでジャングルに行ったと思います。この人も殺されました。社会主義政権は、人を殺してもそうは言いません。この人も道にこの人の名前がついていますよ。1951年にジャングルに帰ったときは写真を送ってくれました。だから、ちゃんと帰ったという顔は写真で見えています。

——そうして貢献のあった方が、どうして殺されなければならないんですか。

ベトナムが二つになったとき<sup>(7)</sup>、この人はハノイに入って、いろいろ不満なことがあったじゃないかと思います。共産党が好きとか嫌いとかではなく、困っている人を助けたい、国のために役立ちたいと思って帰りました。ペニシリンの製造をして助けたい、と、そういうタイプの人間でした。それで、何か言って殺されたんじゃないかと思います。

ハ・ツー<sup>(8)</sup>さんは、ミステリーです。わからないんです。ハ・ツーさんは革命家です。1951年に帰ったんです。中国経由で帰りました。自分の国のために死んでもいいというタイプです。共産主義のためにとかいうのではなく。日本人の奥さんがいるんです。奥さんもやっぱり共産党員ですよ。中国で、自分の赤ちゃんの髪の毛を切って僕たちに送りました

た。何も言わない。でも、その後はわからない。行方不明です。

——「僕たちに」というのは、みなさんご一緒だったんですか。

ええ。僕たちは、国際学友会館に住んでいました。それで、国際学友会館に送ってきました。ホワン・ディンク・ルオンは、ベトナムが二つになったときは、南へ帰りました。彼も僕もアメリカの援助機関で働いていたんです。この人ははっきり、共産党はいやだと言っていました。それで、アメリカへ行きました

ファム・スン・ガンさんは、昨日一緒に静岡の浅羽（佐喜太郎）<sup>(9)</sup>さんの墓参りに行ってお寿司を食べてきました。東京に住んでいますよ。奥さんは日本人で、レストランをやっています。有楽町ビルの地下の「サイゴンレストラン」というレストランです。でも、元気とは言えないね。僕が「フォンです」と言ってもね、昔のことはよく覚えているけれど、新しいことが覚えられないんですね。2時間ぐらいのあいだに何回も「お前いつ来たの？いつ帰るの？」と聞きました。レ・ヴァン・クイさんも、戦後はずっと日本で商売して、日本で死にました。4年か5年前。

——どんな商売ですか。

何でもやる。特に戦後はアメリカとの関係で、闇でも何でもやって金持ちになりました。

ドー・バン・リー<sup>(10)</sup>は元気で、南カリフォルニアにいます。カオダイ教の関係です。

グエン・タン・グエンさんは、5年前に亡くなりました。アメリカで歯医者をしていました。この人の奥さんが、ファン・ティ・リーさんです。一緒にアメリカへ行きました。——招致学生として一緒に来日して勉強していた二人が結婚されたのですね。

そうです。（ファン・ティ）ダオさんは、リーさんの妹です。フィリピン人と結婚して、その後離婚したと聞きますがわかりません。二人は姉妹でベトナムの良い家庭の出身です。——同じ「仏印」からの招致学生にバルテルミーさん、リヴオワランさん、シャントルーさんという「フランス人」がいますね。この方々について教えてください。

シャントルーさんは交換学生です。ものすごくいい人よ。我々とすごく仲がいい。フランス人は面白いですよ。自分の政府の政策と自分の考えは反対の人が多いですよ。シャントルーさんはフランスの植民地政策に反対でした。ベトナムの革命の方向に向いていました。あまり言わないけどね。言ったら怒られちゃうから。あとの二人はよく知らない。

グエン・スン・ワンは、1949年か50年にアメリカへ行ったですよ。そして、1963年に帰ったね。ゴ・ディン・ジエム政権がだめになったころ、ベトナムに帰ってね、次の政権の時は、ベトナム銀行のガバナーやってね、副首相までいったですよ。75年サイゴン陥落の時、あの人は逃げなかった。捕まって2か月くらい牢屋に入ったけど、ハノイの政府を手伝って共産政権の立派な人になったですよ。一昨年亡くなりました。

ホワン・ディ・ルオンは、アメリカに行ってね。1954年に帰ってきました。僕と同じAID、Agency for International Developmentに勤めていました。アメリカの外務省のベトナムに対する経済援助機関です。でも、この人も死にました。共産政権に捕まって、アメリカに関係あった人はやられましたから。

——では、もしフォンさんが残っていたら・・・

同じですね。

——アメリカに住んでいらっしゃるんですね。

幸いにね、フランスかアメリカか日本に住むことはそんなに難しくない。生活のために

はアメリカが一番いいですよ。子どもが四人おったからね。日本にいたらどうやって4人の子どもを大学に送るかわからないけれど、アメリカならできます。

——奥様はベトナムの方ですか。

そうです。僕がサイゴンにおった時ね、会った。僕は家内に言ったですよ、「結婚してから俺はいつもどこか行く。だから、そういう（いつも一緒にいることはできない）」家内は結婚した時若いですよ、23です。ロマンチックですね。でも、これはほんとですから。僕はいつ牢屋に入るか、いつ殺されるか、わかりません。女性は理解していても嫌がります。でも、はっきり言ったからよかったですよ。（結婚して）今年で47年です。

## （2）フォンさんの日本留学

——フォンさんは1943年に16歳で来日されましたね。どんな経緯だったのでしょうか。

僕はね、生まれたのはメコン川の、ラオスとタイの国境のところ。おじいさんとおばあさんは1905、6年ぐらいに、ベトナムから逃げたですよ。たくさんベトナム人があそこ逃げました。当時、タイはシャムといいました。僕はシャムで生まれました。でもラオスはフランスの植民地でしょ。だから、学校へ行くためにラオスの国籍をとりました。母は、僕が4歳のとき、妹を生んで病気で死にました。おじいさんも死んだ。お父さんは革命のためにいろんなところに行って、ときどき帰ってくるだけ。だから、おばあさんと一緒に住んでいました。僕は家族を知らないんです。妹と僕がいっしょに住んだこともあまりないです。親戚のところにも別々に預けられることが多かったですから。父に「お前（日本へ行く）準備しなさい」と、1943年の2月ごろ言われたですよ。16歳の青年だから興奮しますよ。そのころ僕はハノイにいました。3月ごろかな、ハノイからサイゴンに行ったわけ。僕1人よ、1人でサイゴンまで。サイゴンに久我道雄という人が迎えに来ていました。それで、連れていってもらいました。久我さんと日本軍のキャンプみたいなところに行って、初めて味噌汁を飲みましたよ。熱い風呂に入ったり。それから、9月ごろ、久我さんと父とフランスの政府の事務所に行って、パスポートをもらいました。フランスのパスポート。日本留学をどんな風感じたかというのと、もちろん、喜びましたよ。

——クオン・デ殿下が日本にいるのは、そのとき、知っていましたか。

ええ、でもクオン・デ殿下は有名ですから、まさかに会えるとは考えられないですよ。僕はね、サイゴンから日本軍の飛行機に乗ったですよ。日本の司令部がよほど父を立派な革命家と思ったのでしょうか、そうでないと軍用機に乗って行くなど考えられないですよ。飛行機なんて、当時なかなか乗れません。特別ですよ。軍用機には軍人ばかりです。みんな大佐とか偉い人たちですよ。子どもは僕だけです。僕は久我さんと一緒です。でも、そのときはあまり考えなかった。日本へ行ける、よかったと、とても冒険的な考えでね。タイペイ、そして福岡。ベトナムから進んでいる日本へ、一日で。福岡に入った時のインパクトは凄かったですよ。街を見てね、電車が走ってるし、ホテルに入っているいろいろ見てね、日本で使っているものは日本で作ってるじゃないか、と。ベトナムはナイフでも何でもフランスのものです。日本では日本のものを使っています。すごいインパクトでした。翌日汽車に乗って、凄いなと思いました。福岡から、海潜ってね、汽車で。びっくりしましたよ。汽車の窓から日本の田舎が見えましたが、夜になるとみんな電気がついてる。ベトナムは、サイゴンとかハノイとかには電気がありましたが、農村にはありませんでした。

僕は16歳でしたが、このとき変わった。自分の国も日本みたいになりたいと思いました。

——(来日前) ハノイ日本語学校で6ヶ月勉強されると学籍簿にありますけど・・・。

そう。でも大したものじゃないですよ。ハノイで夜の学校で、何千人も日本語を勉強してました。先生はベトナム人です。東遊運動で日本へ行って、帰ってきた人たちです。

でも、(それより)僕は漢字を小さいときから勉強していました。昔の田舎では、どの村でもコミュニティハウスみたいなもんがあつてね。優れた人が漢字を教えてくれるんですよ。テーマはいつも道德。それで、1500以上の漢字を覚えました。だから、日本に来たときは、よかったですよ。(わからないのは)発音と、どういう風に使うかだけです

——なるほど、それはよかったですね。漢字1500を勉強するのに、みなさん大変苦労をされますからね。国際学友会での日本語の勉強はいかがでしたか。

僕の日本語はね、国際学友会で勉強したよりも(ホームステイしていた)久我さんのお宅でね、最初から全部日本語でしょ、それで覚えたのが大きいですよ。先輩たちより上手ですよ。先輩たちは漢字を知らないでしょ。知ってたのはハ・ツーさんだけです。この人は漢字がわかりました。自分で勉強したですよ。漢字を知らない人は大変ですよ。

国を出る前にね、(日本で)軍事を勉強しようと思いました。鉄砲の使い方もわからないようでは、何もできません。

——久我さんのお宅での生活はどうでしたか。

初めてね、久我さんの奥さんを「お母さん」と呼んで、ほんとに息子みたいにしてもらいました。ときどき僕が悪い時も。僕は日本の名前があつたですよ。「清(きよし)」と言います。僕の名前は「陳徳清風」ですよ。その「清」という漢字から、「きよし」としました。ベトナムにおつたときに、つけてもらったんです。「清さん、清さん」と呼ばれました。ベトナムには家族がいない。だから、日本では本当の生活。先輩たちは、日本の家庭に行ったことがないでしょう。でも、僕は日本で24時間、日本の生活。戦後は国際学友会館に住みますが、それまで、久我さんのうちから国際学友会に通っていました。

——日本に着いて、間もなくクオン・デ侯に会われたのですか。

2週間ぐらいですね。ある朝久我さんのお母さんがね、「今日、大事な人に挨拶に行きます」と言ってね。どこの本で読んだかわからないですけど、生きてる雄鶏を僕に持たせてね。誰に会うのかも僕にはわからなかった。ベトナムの習慣でね、偉い人に会いに行くときは生きた雄鶏を持っていくというのがあります。僕は、そんなベトナムの習慣も知らなかったですよ、あとでわかった。あれはベトナムの習慣です。でも、戦争中ですよ。雄鶏、どうやって用意したか。あとで思うとびっくりします。ほんとお母さんでないと、そういうことはしませんよ。

——クオン・デ侯に会われたとき、お母さんもご一緒でしたか。

もちろんですよ。クオン・デ殿下は世田谷のうち<sup>(12)</sup>にいました。そこへ会いに行きました。クオン・デ殿下は日本式の着物を着て、座り方も日本の座り方(正座)で。日本のおじいさんと思いました。そしたら、ベトナム語を話したからね。ああ、ベトナムの人(と分かりました)。そのときクオン・デ殿下は62歳。2時間くらい話しました。でも、そのとき僕は16歳でしょ、何言ってるのかよくわからなかったですよ。「ベトナム語を忘れてはいけない」「外国人と結婚してはいけない」そのことは覚えました。そのくらいですよ。

(殿下は)日本もフランスと変わらない。日本は帝国主義を英国やフランスから勉強した

じゃないか。用心しなくちゃいけないと言いました。だからね、「日本人と結婚してはいけない」とは言いません。「外国人」と言いました。憲兵隊に聞かれたら大変ですから。

(学友会の先生で) 覚えてるのはね、女の方で、永鳥(愛子)先生<sup>(11)</sup>。

——ああ、ベトナム語もおできになりましたでしょう？

そのときは、(僕たちは)日本語だけ勉強しましたけどね。永鳥先生はベトナム語を勉強していましたよ。なぜならば、ルオン・ディン・クアさん。永鳥先生はこのクアさんのことを好きになったですよ。みんな知ってる。クアさんは南のベトナム人でとってもおとなしいタイプ。永鳥先生がベトナム語を覚えたのはクアさんから習った。僕そういうのを聞きました。永鳥先生、そのころ可愛いですよ。若くてね。僕は16歳で、若いでしょ、だから、お姉さんみたいですよ、いつもにこにこしてね。

——今もご健在ですよ。お会いしてお話を聞きました。

そうですか。あー、電話でもしなくちゃいけない。1968年、69年に、家内がこっち(東京)に住んでたときにね、日本語を勉強しようとして、永鳥先生のうちに行って半年くらい教えてもらいました。家内は日本語が全然できなくて大変で、僕もうちにいないでしょ。どうしようかなと思いましたが、それでクイさんに相談したら「お前覚えてる？永鳥先生。今は結婚して中村先生。電話したらいい」と。あとの先生はあまり覚えてないですね。

——学友会は楽しかったですか。

そうですね。毎日先輩と会えたから。学友会で日本語勉強をしなければ、国の人たちにみんな会えなかったですよ。

疎開したのは1945年ね。東京大空襲のあとです。(東京の)家が焼けたからしょうがない。それで疎開しました。お母さんが長野について来てくれました。ほんとお母さんと同じですよ。毎朝早く起きてね、ご飯炊いて朝ごはん作って、僕はそれ食べて、それから(伊那)中学に出掛けるんです。そこでアメリカ人の兵隊をどう殺すかとかそういう勉強。

そのときの僕は日本人と同じですから。そのときの日本人の精神は、今考えても感心します。大空襲であれだけやられてもね、もうだめとか、負けるとか、(悲観的になったり絶望したり)全然考えなかった。その点は日本はいい。いい点も悪い点もあるでしょ、でも、僕はいい点は勉強する。悪い点はしょうがない。悪いところもいっぱいあるでしょ、今でも。人間はそうだから。神様じゃないでしょ。

(ベトナムでは)フランスが日本の軍に必要なこと、全部しましたよ。米がほしいと言うとフランスが用意しました。日本軍はうまいことしましたよ。ベトナム独立でクオン・デ殿下を王様にしたらどうやってインドシナを経営しますか。フランスにやらせてフランスに言えば(日本はベトナムを思う通りにできて)いいでしょう。そうやったんですよ。

——長野からいつ帰ってこられましたか。

戦後すぐですよ。だいたい1週間後、(グエン・スン)ワンさんが長野に迎えに来てくれました。ワンさんは京都大学に通ってましたから、僕を京都に連れていってくれました。その二日後には、ハ・ツーさんとグーさんが来てくれました。でも、その時、僕はもう京都にいた。僕は一番若いでしょう。みんな心配してくれたんです。お母さんは、僕が京都に行ったときは長野に残っていました。中村というお百姓さんの家にいましたが、そこに電話があったんです。ワンさんは多分、外務省に聞いたんでしょう。電話をかけてきたんですよ。ハ・ツーさんも、グーさんも。きっと外務省に聞いたでしょう。



京都では、ファム・ダイ・タイさんの家に住みました。ファムさんは（大阪大学に通っていて）、大阪と京都の間に住んでいました。1か月くらいファムさんの家において10月ごろに東京に戻りました。11月に戦後最初の大きなデモをやった、みんなでね。

戦後はね、インドネシアの学生とベトナムの学生はいちばん仲がよかったです。国が同じような目にあっちゃったでしょ。だから一緒にデモをしました。フランスが悪いとかオランダが悪いとか、日本で。日本人もアメリカのGIもついてくる、というデモです。フィリピンはアメリカが勝ったから、すぐにアメリカになっちゃいました。アメリカ風の生活をして、英語でね。僕たちは、オランダ語とかフランス語とか、違うでしょ。

——戦後の国際学友会館の食事などはどうでしたか。

食事は、だって、食べ物がないでしょう。だから、何を出したっておいしいですよ。食事があるだけで、もう、食事の文句なんて言えないですよ。

——そのころ、クオン・デ殿下は。

疎開したとき、僕はクオン・デ殿下と連絡できなくなりました。1945年の11月に東京にでデモしたときね、その前に、連絡をしようとしたんですが、住んでいたところ（世田谷の家）焼けてしまって、電話が通じませんでした。2,3日して、やっと電話が通じました。

「お元気ですか。また挨拶にいきます」と。殿下はね「大丈夫、心配しないで、大丈夫、怪我もない、何もない」そう言ってね。1946年の2月か3月、戦後初めて会いに行きました。ですから8ヶ月くらい会わなかったですね。疎開してから。

——そのころは、国際学友会館に住んでいらしたのですか。

そうです。そして、進駐軍に勤めていました。国際学友会館から進駐軍に通っていました。進駐軍の中には学校もありました。大学と同じですよ。アメリカ式の勉強の仕方です。僕よかったですよ。ただで勉強できました。それから食べ物や日常のものが買えるでしょう。あれを買ってクオン・デ殿下に持っていったりもしました。

### （3）クオン・デ侯のことなど

——そのころ、クオン・デ殿下はどんな生活をしていらしたのですか。

困ってました。その時、クオン・デ殿下は中央線のどこかの粗末な家<sup>(13)</sup>に静かに隠れて住んでいました。食べ物は、コーリャンという穀物があるでしょう。馬に食べさせるものですけれど、それを人間が食べてました。3,4時間もクックして、柔らかくして食べてました。米がないから。戦後のそういうことは、今話してもわからない。体験しないとこれは無理です。僕が持っていた占領軍のコーヒーとか缶詰とか、それをまた売るんです。日本にはないからお金を持ってる人でも買えないんです。だから闇市場があるんです。

——（東京外国語大学の）今井昭夫先生<sup>(14)</sup>から質問をお預かりしています。「ベトナムからの留学生が少なかったのは、クオン・デ侯が多数の留学生を日本へ送り込むことを望んでいなかったからですか。」確かに少なかったですね、ベトナムからの学生は。

そうね。1940年（にベトナムで起きた反仏蜂起）に、日本はベトナムのために何もやってくれない、不満でがっかりしましたよ。（クオン・デ侯は）それは日本人には言わない。誰にも話せないから、僕たちに話します。「お前たち、覚えなさい。外国人を頼んだらね、自分は何もできない。自分の力でないとだめ。」そういうことを、何回も何回も言いました。

だから（日本留学に）来い来いとは言わなかった。だからね、少ししかないでしょ。

フィリピンやインドネシアは何百人来たでしょ。(ベトナムにも)日本へ行きたいという人は何千人もいましたよ。僕の通ったハノイ日本語学校でも。

——たくさんの若者が日本へ行きたかった。でも、どうして行けませんでしたか。

インドネシアやフィリピンと、ベトナムが違うのは、インドネシアやフィリピンは日本が直接軍政を敷いた。でも、ベトナムはフランス(の植民地)ですからね。日本の権限がないですよ。日本で誰か受け入れてくれないと。僕が日本へ行くことになった時、みんなが「あー、どうしてあんたは行ける」と言いましたよ。

——これも、今井先生からの質問なんですけれど、1950年8月にゴ・ディン・ジエム(Ngo Dinh Diem)が東京に来たとき、クオン・デ侯と会っていますね。このとき、どんなことが話し合われたのか、また会談の目的は何だったのか、ご存じでしょうか。

何の話か知らない。ただ、翌日クオン・デ殿下はゴ・ディン・ジエムを連れて国際学友会に来ましたよ。そこで残ってる人たちに、そうね、2,3時間ぐらい(話しました)。僕は一生懸命聞きました。そのときは、ゴ・ディン・ジエムもクオン・デ殿下も言ったですよ。ベトナムはこのままでは、外国の帝国主義のために死んでしまいます。片方はアメリカ、片方はソ連。何か方法を探さなければならない。だから、たぶん、2人はあのとき、クオン・デ殿下が帰ることを考えたと思います。帰ったらクオン・デ殿下の名前は、ホー・チ・ミンよりも大きいですから、何かできるんじゃないかと。それで、ゴ・ディン・ジエムはそのあとアメリカへ行って運動しました。東京に来たのはその途中でした。ゴ・ディン・ジエムは首相になろうと思ってたでしょうね。そのときにクオン・デ殿下を連れて帰ろうと思ったでしょう。でも翌年、クオン・デ殿下は死にました<sup>(15)</sup>。

——戦争が終わって5年たっていますが、ベトナムの留学生はかなり残っていたんですか。

そう。全部ではないけどね。クオン・デ殿下に会いにいった回数は、私が一番多いんじゃないかと思います。先輩はそれぞれ自分の計画があったでしょ、ある人はアメリカに行く、ある人は国に帰るとか。私はそういうことは考えなかった。クイさんと僕とクオン・デ殿下の秘書のニップさん。この3人はクオン・デ殿下が死ぬまでそばにいました。3人だけです。呉文孟さんも秘書だったけど戦後すぐ死んじゃって、その時はもういません。

——クオン・デ侯はどうしてカオダイ教と深い関係を持っていたのでしょうか。

カオダイ教はね。革命のための宗教です。カオダイ(の意味)は高い台です。でも、カオダイ(Cao Dai)ね、CD。CDはクオン・デ殿下のCDですよ。作った人はクオン・デ殿下を考えて、クオン・デ殿下を王様にして、と考えたですよ。だから面白い宗教で、誰でも入れる。神道の人でも誰でも入れる。何を拝むか。何でも拝む。お釈迦様も、ジーザス・クライストも誰でも拝む。そうすると、みんな喜ぶでしょう。クオン・デ殿下の遺言は、自分の遺骨とかをカオダイに残すことでした。これは正式な文書があります。

1954年10月。カオダイ教の教主、ファン・コン・タク(Pham Cong Tac)という人が日本へ来て、クイさんと僕に「お寺に頼んで遺骨をもらってください」と頼みました。お寺の名前覚えてないけど連絡してね。もらった遺骨は1954年、東京の宮城の前のパレスホテルで渡しました。ファン・コン・タクがクオン・デ殿下の遺言のとおりになりたいというので。しかし、ゴ・ディン・ジエムは喜ばなかった。この時ゴ・ディン・ジエムは首相で、まだ大統領じゃない。クオン・デ殿下の問題は自分でやりたかったもので、ファン・コン・タクが政治的にクオン・デ殿下を使うのは、喜ばなかったです。それで、1957年に

ね、新聞読んでびっくりしました。クオン・デ侯の遺骨をゴ・ディン・ジエムがサイゴンに迎え入れたと。死んでからもクオン・デさんは政治に使われた。これ日本が悪い。

——1954年にフォンさんたちが渡された遺骨が、改めて1957年にもちだされたのですか。

いえ。そうじゃない。あのとき（お寺が）僕たちに渡したのは一部だけ。そういうずるいことがあったんですよ。お寺の人と政治家と、だれが考えたか知らんけど。僕の考えではどちらも本物の遺骨でしょうけれど、分けたんですよ。僕は全部と思ってたけど。

賠償問題（日本・南ベトナム間の戦時賠償交渉）のときは、ぼくはサイゴンにおってね。

——フォンさんは1955年にサイゴンに帰られたんですね。

そう。アメリカの政府の招待で僕は帰ったんです。

——日本ではそのとき進駐軍で働いていたんですね。

いえ。そのときは、もう進駐軍関係ない。クイさんと二人でコンサルタントみたいなことやっていました。ベトナムと商売したい人にアドバイスをする **Trade consultant** みたいな仕事です。僕はね、東京でインドネシアの学生と親しかったでしょ。僕の親友がインドネシアの賠償のことで働いてたから勉強したですよ。インドネシアの賠償では大きな寮を作って、大勢の賠償留学生を送った。インドネシアはよかったです。留学生は、日本との関係も密接にできるから日本政府もよかったですよ。しかし、（ベトナムは）あの時ダム一つだけ。発電所だけ。大損害でしたよ。ベトナムも同じことをしたらよかった。でも、できなかったからしょうがない。

——今、ベトナムからの留学生が増えて、交流も活発になっています。

そうね。このあいだのシンポジウムね、若い日本人が聞きにきたでしょ。それ、僕感心しました。ベトナムの、ファン・ボイ・チャウという遠い人、その人を理解したいと勉強したいという日本人の人たちがいる。それが何よりも尊いことです。

——今、日本の若い人でベトナムに行く人も多いです。

あれは、遊びに行くんですよ。でもね、100人のうち1人でも、何かこのベトナム人、ベトナムを発見した、何か変わった。それでいいですよ、1000人に1人でもいいですよ。僕はそう思います。

## [注]

(1) 外務省文化事業部では中国に対する事業は「対支文化事業」担当課が管轄しており、新たに設置された「国際文化事業」担当課では、中国以外の地域を担当した。

(2) 国際学友会の日本語学習者 389 名分の学籍簿情報は河路（2006）の巻末にまとめて示した。

(3) 久我道雄は大尉で、インドシナ独立のため、ゴ・ディン・ジエムとの交渉を行った[神谷 2005 : 127]。この時期の日本にはクオン・デを擁立してベトナムの独立を目指す力と、フランスと結んでベトナムの独立運動を抑えようとする力があり、結果的にはベトナムの独立を目指してやってきた留学生やクオン・デは日本に期待した支援を得られなかった。

(4) クオン・デはベトナムのグエン朝直系の王子で、革命家のファン・ボイ・チャウと交流があり 1906 年に日本に亡命していた。

(5) 発表の機会を逸してきたが、河路（2011）などに、この資料より引用した部分がある。

(6) 国際学友会の日本語教育は、1943年3月までは国際学友会館の日本語教室として行われていたが、1943年4月には各種学校としての認可を受けた国際学友会日本語学校となった[河路 2006]。

- (7) 1946年から1954年に渡ったベトナムにおける抗仏独立戦争で、1954年フランスが敗北し戦争は終結したが、北緯17度線で国土が南北に分断された。北はベトナム民主共和国で主席はホー・チ・ミン。南はアメリカを後ろ盾に10月ゴ・ディン・ジエムが大統領に就任しベトナム共和国とした。
- (8) ハ・ツーについては、1975年6月2日(月)毎日新聞に関連記事がある。見出しに「平和がきたいま／留学生と結婚 25年消息を絶つ／「ベトナムの姉きつと探す」とあり、鈴木新さん(45)が、姉の延子(50)を探しているという内容である。記事によると、延子は1948年に日本女子大を卒業後、東京外国語大学ロシア語科に進学。ハ・ツーは戦前東北大に留学し日本で終戦を迎え、戦後東大法学部の研究員をしていて、1948年に延子と結婚した。2年後、息子のトウンを連れてベトナムに渡った。まもなく延子より北京発信の手紙が来たが、その後消息を絶った。1965年ごろ、鈴木氏はベトナム人留学生を通して、ハ・ツーは北京の北ベトナム大使館で要職についたはずだと聞いた。
- (9) 浅羽佐喜太郎(1867-1910)は静岡の医師で、日本政府に援助を求めたがかなわず落胆していたファン・ボイ・チャウに私財を与えて励ました。43歳で亡くなった浅羽佐喜太郎を偲んで、ファン・ボイ・チャウが静岡の佐喜太郎の菩提寺に記念碑を建てた。フォン氏は本調査の前日、ファム・スン・ガン氏と連れだつてこの記念碑を訪ねた。
- (10) 中村愛子氏の保管していた資料によると、ドー・パン・リーは、1972年11月、駐日ベトナム大使館の大使であった。中村氏はこのときパーティーに招かれて彼の話聞いた。
- (11) 中村愛子氏へは1994年8月に聞き取り調査をしている[河路2006:279-295]。
- (12) クォン・デは東京で住まいを何度も変えているが、1941年、日本軍が仏印に進駐して後、軍部からの援助に加え商社からの献金を受けて、世田谷区松原町の邸宅で暮らした。別館に若い留学生を住まわせていたという。日本軍はフランスとの協調を優先しつつ、いざというときの切り札として、クォン・デを手元においておこうと判断したものらしい[森2003:218]。
- (13) 戦争でそれまで住んでいた世田谷の家を消失したクォン・デは、戦後、慶応大学名誉教授、橋本増吉の申し出で、荻窪の橋本の自宅の二階の二間を借りて住んだ。ここで亡くなるまで、家政婦の安藤ちゑとその甥の成行と3人で暮らした[森2003:.227]。
- (14) 東京外国語大学教授、今井昭夫氏は東京外国語大学にて行なわれた「ベトナム東遊運動百周年記念シンポジウム」の世話人で、フォンさんへの聞き取り調査の実現の橋渡しをしてくださった。
- (15) クォン・デは、戦後、GHQに帰国を直訴し、1950年7月、来日時に用いた中国人名を使ってバンコク行きの船に乗ったが、フランス大使館から連絡を受けたタイ政府が上陸を拒否し、同じ船で日本に戻された。1951年1月には末期の肝臓ガンで入院するが、本人の意思で荻窪の家にもどり4月6日、安藤ちゑのみに看取られ息を引き取った。

#### [文献]

- 神谷美保子,2005,『ベトナム1945—明号作戦とインドシナ三国独立の経緯』文芸社
- 亀山哲三,1996,『南洋学院—戦時下ベトナムに作られた外地校』芙蓉書房出版
- 河路由佳,2006,『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生—戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開』港の人
- 河路由佳,2011,『日本語教育と戦争—国際文化事業の理想と変容』新曜社
- 森達也,2003,『ベトナムから来たもう一人のラストエンペラー』角川書店

(かわじ ゆか, 東京外国語大学総合国際学研究院教授)